解説

絵はがきに観る

（その二）佐伯市街俯瞰

羽柴　弘

次のページの絵はがきは、佐伯人なら一目で、これは城山から佐伯市街を見下した写真だと、すぐわかる絵はがきである。

あなたは何でそうおわかりになったか。佐伯小学校出身の方なら、立ち並んでいる校舎と広い校庭で、すぐにそれと判り、くい入るようにしばしなつかしむ筈である。よく見てほしい。この一枚の絵はがきを――――。

ゆるやかに光って流れている番匠の清流、しかしこの河道は、今はほとんど変っている。池船橋は長々と写っているが、住吉大橋はまだ架っていない。番匠川河川改修以前の写真であるので、蛇行橋が写っている。今高々と改修された両岸の堤防はどのあたりであるか、想像していただきたい。

遠く難山や、津志河内のあたり、はるかに霞んで見える元越山、これをなつかしく思わない人は、佐伯にゆかりの薄い人である。

中川の向う、女島の田圃の真中を、中江川が分流して左に流れていて、今は殆んどそのままの女島への道路が見えているが、この田圃に殆んど家がない。もう今は中江川の手前も向こうも、住宅が一ぱい立てこんでいる。これだけでも、隔世の感がする。この写真は何時のものであろうか。御判定願いたい。勿論こんな写真は、終戦後のものには間違いない。

次に、佐伯小学校の姿をじっくりと見たい。なつかしい二階建の校舎が六棟が、このような姿であった。くわしく見ると、尚二三の建物と渡り廊下などが、はっきり写っている。今年の六月、開校百周年を祝った光景の佐伯小学校である。私は昭和十八年のころ一か年、この通りの佐伯小学校に勤務していたので、感慨ふかいものがあるが、はからずも手に入れた大量の絵はがきの中で、この一枚だけでも、四百八会員皆さんにお眼にかけることが出来てうれしい。

佐伯小学校の右向こう、少しはなれた大手前の広場に、佐伯警察署の庁舎が、はっきり見える。ここには今寿屋の、佐伯第一の八階建ビルが、大きくそびえているところである。

佐伯小学校の前に、昔の南海部郡役所、郡制廃止後は次々と公共の庁舎となった建物が、その二階建の大屋根を白く光らせている。この建物も先年こわされて無く、敷地が駐車場の格好で使われている。

もう一度、池船橋にかえるが、それは最初にこの橋がかかった時（明治十六年）、池田（上堅田村）と船頭町をつないだ、佐伯唯一の長い橋であった。しかも堅田をはじめ、木立、米水津、入津、蒲江へと通ずる重要な橋で、その果たした役割は大きかった。今は両岸が埋め立てられ、橋の長さも半分以下になり、車や人の交通量は多くなく、影がうすれた感じである。

写真左の方に、萩山と長島山の端渡町の山と、その向う女島の山が重なっていて、惜しいことにはっきり写っていないが、長島山はブルドーザーでけずられて、赤茶けた膚を見せて低くなっている。しかしそれは今の話で、城山は言うまでもなく、市中にも点々と緑が多く、番匠の流れ、広がっている田圃、青々と望める山並、明るく

美しい田園都市の姿であった。

しかし今は全くちがって来ている。女島へ通ずる道路の左右、女島橋の向こう、広々と見えている田園も、今は紅い屋根、青い屋根、きわめてカラフルな住宅が建って、今は濱所寄りに園芸用のビニールハウスがある外、農耕用地はきわめて少なくなっている。女島橋のたもとに、老人ホームの姿すらなくて、終戦後間もないころの混乱、疲弊の記憶が、寒々とよみがえってくる。

船頭町・内町の一部、佐伯市街の中心部については、拡大鏡を用いて入念にしらべたら、当時の家並みもわかろう。しかし概ねゴチャゴチャしている。長い戦争でつかれはてたままの姿といえよう。軍都佐伯が、呆然自失していた頃であろう。

今はすっかり様子が変っている。まず、佐伯小学校が変っている。堂々と白壁の鉄筋コンクリートで、当座は異彩を放っていた。警察署が常盤辺に移り、その後に青屋が、城下町佐伯にはいささか不似合なほどの、八階建ての百貨店として威容を示している。広小路にも六階建てのビジネスホテルが出現した。

この絵はがきにはその場所もあまり出ていないが、船頭町川は両岸を広々と埋立て、左岸にはバイパスが出来新しく商店街すら生まれている。これに住吉大橋、お作事橋、城南橋など、幾つもの堅牢な橋が出来て、車や人の流れがどんどん変っている。

しかし、私どもの眼(まぶた)の中には、この写真のような佐伯の町並みがなつかしく、いつまでも残っているのは何故だろう。

国破レテ山河アリ
城春ニシテ草木青シ

佐伯名所　鶴谷城跡より佐伯市街を望む

と中国の詩人は詠嘆している。終戦―それは完全な敗戦であったが、いささか戦禍をうけた佐伯市も、約三十年の戦後の歩みで、復興から伸展への目覚ましい姿を見せているが、そのことはこのような写真を見ることによってはっきりするものである。

人はみな、過ぎ去った昔となつかしむものである。それは決して老人の懐古趣味とだけにけなしてはならない。故きを尋ねて新しきを知る。まだ三十年たたない、終戦後数年たったばかりの佐伯市は、このような姿であったことをご紹介申した次第である。

（おわび）八月八九十五号につづいて、十月の九十六号に掲載の予定のところ、うっかり忘れてしまい、今回これをお目にかける次第、百号まで次々と連載の予定であるのでおゆるし願いたい。

報告

国東半島の仏教文化を訪ねて

―楽しかった一泊二日のバスの旅―

参加人員　四一名（青山二名、御前二名、短歌会四名外）

文化の日からの連休で、文化祭や体育会の行事で出席出来ない向が多かった。短歌会の方々の参加のあったのはよかった。

日時　十二月三日（日曜・文化の日）午前七時バス佐伯駅前発
十一月四日（月曜・代休）　午後六時半（三〇分早く）帰着

概況　両日とも天気上々、絶好の旅行日和であった。
予定の通り国道十号線を北上、立石から峠を越して田染に入り、まず真木大堂で収蔵庫のみ仏を拝した。さすがにご本尊阿弥陀如来像をはじめとする九体の仏像が、一堂に明るく輝されたが、大威徳明王不動明王のすばらしい迫力に打たれる思いであった。九体の仏像すべて国の重要文化財である。
ついで富貴寺、大堂は国宝、本尊阿弥陀如来坐像は国の重要文化財、その外壁画、境内の石造品など、この寺は何度訪ねてもよい。
豊後高田市のわが会員岩野勝先生が案内して下さり、バスは真玉町に入り、予定の椿堂だけでなく程近い無動寺と応暦寺とまわり、それぞれ特徴あるお寺の様子に接した。つづいて香々地町を経て、夕方国見町の別宮八幡に参拝、荘厳な社殿、巨大な国東塔など岩野先生のご説明をいただいて、最後にうす暗くなった境内で、私共には珍らしい世神を見る。
宿は程近い三国座、にぎやかな懇親をかねた夕食を楽しんだ。

第二日目よい天気、朝八時半出発、下城部でまずペトロカスイの銅像に立よる。ここだけは仏教でなく、神社でもなくて、キリスト教であった。
ダンダラ来崎の浜で、国東町の堀地先生が迎えて下さり、岩戸寺をたずねる。昨日の寺々は里の寺であったが、今日は次の文殊仙寺と共に山寺である。海岸から遠くはいった天台系の山岳仏教である。山であるから紅葉がすばらしかった。岩戸寺は国東塔・修正鬼会、文殊仙寺の紅葉と石塔、石仏など、みんなの心をとらえた。文殊仙寺での昼食も楽しかった。
午後は国東町に出て南館まで近の、歴史民俗資料館を特に見せていただく。興味ふかくみんな熱心に見入った。それから桜八幡の社叢など見、途中安岐町の大分空港に立ちより帰路についたが、佐伯には予定より三十分早く帰着、大成功であった。

会計報告　最終不足　五〇六千円 ⇒ 史談会会計より研修費として負担する

○受入
会員負担会費（六、〇〇〇円宛四十一人分）　二四六、〇〇〇円
エンコ自動車より礼金　一、〇〇〇円
計　二四七、〇〇〇円

○支出
バス借上料　九八、五〇〇円
宿泊料・弁当料　一三二、一二〇円
謝礼（両先生バス乗込員）　四、八四〇円
寺院拝観料お礼　六寺分　一〇、五六〇円
計　二四六、〇二〇円

差引残り　九八〇円（但し八ミリ映写フィルム配付写真等で約五、〇〇〇円不足となる）